

# 中国語の“也”と日本語の“も”の“強調”機能について

## —関連性理論の観点から—

さい  
崔

しゅん  
春

あい  
愛

### 要 旨

中国語の“也”と日本語の“も”は統語論上違うところがあるものの、“類似<sup>1)</sup>”(昨天买了苹果, 也买了葡萄「昨日りんごを買った。葡萄も買った。»)・“強調<sup>2)</sup>”(忙的时候星期天也去公司「忙しい時には日曜日も会社に行く。»)・“柔らげ”(为什么没告诉我, 你也太客气了「なんで教えてくれなかったの、あんたも本当に遠慮深いんだから。»)等の用法に関してはかなり共通する部分も見られる。“也”と“も”にはこのように“類似”や“強調”、“柔らげ”の三つの機能を持つが、聞き手はいかにして話し手の意図を正確に汲み取ることができるのだろうか。また、聞き手の解釈過程においてどのような原理が働いているか、本稿では“也”と“も”の“強調”機能について関連性理論の観点から考察することを目的とする。

【キーワード】 也 も 強調 関連性理論

### 1. はじめに

崔(2006)では中国語の“也”の“類似”の機能について考察を行い、“也”の付加された発話が文脈によっていろいろな意味に解釈されるケースがあることを指摘した。また、話し手と聞き手の間でどのように曖昧な発話を具体的に一つの意味に特定し、正確に解釈していくか、関連性理論の観点からそのメカニズムについて分析している<sup>3)</sup>。崔(2006)は“也”が文によっていくつかの成分にフォーカス<sup>4)</sup>がかかる可能性があるとして主張し、発話例(1)を挙げて説明を行っている。

(1) 日本 明年 也 将 把 服饰品 出口 到 中国。

日本 来年 も であろう(副詞) を(介詞) 服飾品 輸出する に(場所への到達) 中国

(a) (b)

(c) (d)

(e)

(崔 2006; p.32)

フォーカスがかかる場所が違えば、意味も違ってくる。発話例(1)の(a),(b),(c),(d),(e)の場所にフォーカスがかかった場合、その日本語の意味は以下で示すように、それぞれ異なる意味に解釈される。

a 日本も来年服飾品を中国に輸出するだろう。(フランスも日本も)

b 日本は来年も服飾品を中国に輸出するだろう。(今年も来年も)

- c 日本は来年服飾品も中国に輸出するだろう。(電気製品も服飾品も)
- d 日本は来年服飾品を中国に輸出もするだろう。(輸入も輸出も)
- e 日本は来年服飾品を中国にも輸出するだろう。(韓国にも中国にも)

実際の会話の中でこのような曖昧な文が、どのように特定されていくのであろうか。まず考えられるのは、語気で示すことである。つまり、フォーカスがかかる部分を強調し、ストレスをおいて強く発音することである。また、場合によってはフォーカスがかかる部分を文の一番前に置くことによって強調することもできるが、この発話においてこのように強調できるのは「日本」と「来年」の二つの言葉に限る。中国語では語順がかなり固定されているが、時間詞に関しては主語の前に位置したり主語の後ろに位置したりすることが可能である。そのため、この発話で時間詞である「来年」は主語である「日本」の前に位置することは許されるが、その他の言葉は「日本」の前に位置することは許されない。このように、発音の仕方や語順でどの部分にフォーカスがかかるかを表すことも可能だが、実際中国語母語話者同士で会話をする時、語気で示したり語順で示したりするよりもその場その場の文脈を頼りに特定していくことが多いだろう。

上記の発話例(1)のaからeまでは、ただ“也”の“類似”の用法に限った例である。実際、“也”には他にも“強調”、“柔らげ”などの機能を兼ね備えている。本稿では“也”の持つもう一つの機能—“強調”—に焦点を合わせ、考察を行う。本稿で取り扱う“強調”というのは、事態実現の可能性がより低いと話者が予想した要素が“也”あるいは“も”の付加された命題と結びつくことによって、それと比べて事態実現の可能性がより高い要素が含意され、とりたての対象となる事物もしくは事態の異常を際立たせる効果のことを指す。下記の発話例(2)と発話例(3)はそれぞれ中国語の“也”と日本語の“も”の“強調”機能を示している。

- (2)      zhè      jiàn      shì      zuì      zhīxīndepéngyou      yě      méi      gào su  
          这      件      事      最      知心的朋友      也      没      告诉。  
          この 件(量詞)      事      最も      心の許せる親友      も      ~ていない      教える  
          このことは一番心の許せる親友にもも教えていない。

- (3) 先生にもこの問題が答えられなかった。

上述の発話例(2)と発話例(3)はそれぞれ“也”と“も”の“強調”の機能を示している例である。まず発話例(2)において、一般的に考えてある情報や事柄を「没告诉熟人(知人に教えなかった)」ことは予想される可能性が比較的に高い。それに対し、気心の知れた友人に内緒にして「没告诉最知心的朋友(一番心の許せる親友に教えなかった)」になると比較的に予想される可能性が低くなる。つまりこの発話で「没告诉(教えていない)」相手として可能性がより低いと話者が予想した要素「最知心的朋友(一番心の許せる親友)」が“也”の付加された命題と結びつくことによって、それと比べて可能性がより高い要素「熟人(知人)」が含意され、とりたての対象となる事柄「没告诉最知心的朋友(一番心の許せる親友に教えなかった)」の異常さ(意外性を含め)を際立たせる効果を持つ。

このような“也”の使い方を本稿では“強調”とみなす。同様に、発話例(3)で日本語の“も”も“強調”の効果を持つ。難しい問題に関して「生徒は答えられなかった」というのは一般的に予想される可能性が高い。しかし、教える側にいる「先生が答えられなかった」となると予想される可能性が極めて低くなる。この発話では、「答えられなかった」人として予想される可能性がより低い要素「先生」が“も”の付加された命題と結びつくことによって、より予想される可能性の高い「生徒」が含意され、とりたての対象となる事柄「先生にも答えられなかった」ことの異常さを際立たせている。“も”の持つこのような効果を本稿では“強調”としている。

しかし、なぜ私達に発話例(2)での「没告诉熟人(知り合いに教えなかった)」と発話例(3)での「生徒には答えられなかった」といった明言されていない部分が暗黙裡に伝わってくるのだろうか。つまり、どうして話し手が言っていない内容が推論できるのだろうか。また、どうして私たちは発話例(2)での“也”と発話例(3)での“も”を単に“類似”あるいは“柔らげ”の機能としてではなく、ある部分を“強調”していると解釈できるのだろうか。

本稿では、“也”と“も”の“強調”機能に焦点をあわせ、関連性理論から以上の質問に答えることを試みる。そのために、まず第2節では“也”と“も”にどのような相違点があるか、先行研究について考察する。第3節では、話し手と聞き手が意思疎通をスムーズに行うその過程でどんな原理が働いているのかを分析するために関連性理論について概観する。第4節では、“也”と“も”の付加された発話について考察を行う。

## 2. 先行研究

伊藤(1996)は“も”のとりたて機能を考察する際、“も”を意味的レベル<sup>5)</sup>と語用的レベル<sup>6)</sup>に分ける立場を取り、“意外/強調”<sup>7)</sup>は“も”自体が持つ“意味”によるものではなく、語用的に表現される効果であると考えたと述べている。つまり、「いわゆる“意外/強調”という解釈には音声的卓立やモダリティ要素の付加そして文脈からの情報などの語用論的要素が関わってくる理由から、これらの“意外/強調”を『も』の意味素性によるものではないと考えるのである」(p.93)と述べている。伊藤(1996)は更に、意味的レベルと語用的レベルをそれぞれ別個のものとして捉えるのではなく、意味的レベルの延長線上に語用的レベルがあると捉えている。

一方、中川(1982)も“也”と“も”の持つ機能をそれぞれ別個のものとしてではなく、『結びつきの強弱の幅』の違いと捉えている。中川(1982)はまず「は」・「是」<sup>8)</sup>と“も”・“也”の相違点について、前者は「ある項とある項とをそれ以外の結びつきは存在しないという形での認定」(p.154)であるとし、後者については「一対一で結びつけることを避ける気持ちは当然『接続』の『も』・『也』にも見られる」(p.154)と述べた上、更に、「譲歩・逆説などと言うのは、勿論結びつけられる二項の個性に由来するものではあるが、接続という一点を注視すれば、その結びつきの強弱、裏返して言えばねじれ方の強弱の差を言うにすぎない。結びつきには強弱の幅がある。」(p.154)と述べている。また「その結びつきがかすかな場合、そのかすかな結びつきをさえ否定してしまう、二重否定にも近いもの、それがここでの『強調』である」(p.154)と主張している。そして、中川(1982)

は“也”と“も”の接続作用について、『も』が前句に含まれ後句を引き寄せるのに対して、『也』は後句にあって前句と結びつく。」(p.154)と指摘し、統語論的位置においては「『也』は位置が固定されているが、『も』はかなり自由である。」(p.154)と述べている。

また、楊(2002)は中国語の“也”の基本義を日本語と同様に、“類似事態の追加<sup>9)</sup>”とみなすことができるとしている。更に楊(2002)は日本語の“も”と中国語の“也”の“意外<sup>10)</sup>”は派生的用法であると指摘している。そして、中国語では形式的には“X+也”と“也+X”の二種類のパターンがあるが、“X+也”のみが語用論的には意外性を表すと述べている。更に、表(1)に示されたように、この文献によれば、“も”が“意外”を表す時、「名詞+も」と「数量詞+も」は事態実現の可能性の小さい値を提示する機能を持つ点では同じであるが、前者では意外性が述語や文脈を必要とし、後者においては、そうした述語や文脈を考慮にいれる必要がないとしている。

表1 日本語の“意外”を表す“も”

名詞+も	数量詞+も
事態実現の可能性の小さい値を提示する機能を持つ。	
意外性が述語や文脈を必要とする。	意外性が述語や文脈を必要としない。

(楊(2002)を筆者がまとめたもの)

以上、三つの文献ではそれぞれにおいて用いられている用語が異なったり、研究目的が異なったり細部においては違いも見られたものの、全体的に見て、“強調”は“類似”と別個のものではなく、“類似”の延長線上にあるもの(伊藤, 1996)、接続において『結びつきの強弱の幅』(中川, 1982)、“類似”の派生的用法(楊, 2002)であると指摘している。

本稿では以上の先行文献を踏まえて、“強調”は“類似”と完全に異なる別個のものとしてではなく、その「延長線上にあるもの」として捉える。さらに以下第3節での認知語用論としての関連性理論の原理に基づいて、“也”と“も”の“強調”機能について分析を行う。

### 3. 関連性理論

Sperber & Wilson (1986) によって提唱された関連性理論 (Relevance Theory) は、コミュニケーションの理論である。この理論によると、話し手が一つのメッセージを伝達する際、複数の方法があり得る。そして、話し手は聞き手に自分の意味を伝達するために伝達的手段として言語を用いる際、語の選択や伝達したいことをどれだけ言語化する必要があるかなどの判断を下さなければならない。例えば、「どれだけ言語化する必要があるか」の問題だが、前述の発話例(2)を相手に伝える時、「这件事熟人我没告诉, 最知心的朋友我也没告诉 (このことは知り合いに教えていないし、一番心の許せる親友にも教えていない)」のように誰に教えていないかその人たちを具体的に挙げることも可能だし、「这件事最知心的朋友也没告诉 (このことは一番心の許せる親友にも教えていない)」と発話することによって、同時に「熟人我没告诉 (知り合いに教えていない)」ことを暗に意味することもできる。西山 (1995) によると、「言語表現自体は (メッセージを表すという点で) 不

完全であつても相手が当のメッセージを復元できると話し手側で見込めるかぎり、あえてその（不完全な）表現を口にすることはめずらしくない。そればかりか、むしろその方がコミュニケーションはうまく行くことが多いのである。このことは、聞き手は発話で用いられた表現自体の意味ばかりでなく、それ以外の意味をも計算する能力があることを示す（p.30）とある。

そして、話し手が発話する際、「語の選択」をするわけだが、発話で使用される語の意味はしばしば話し手の伝えようと意図することへの「手がかり」でしかない。そのため、聞き手は話し手の発話を正確に理解するためには話し手が用いた言葉を「手がかり」に、それを言語的意味以上に発展させねばならない。例えば、前述の発話例（3）「先生にもこの問題が答えられなかった」という発話を耳にした聞き手は“も”の持つ文法的機能から、「この問題に答えられなかった」人は「先生」のほかにもいると理解できる。しかし、これは話し手の伝えようとする意図とはまだ程遠い。そこで、聞き手は上述のように文法的知識を手がかりに発話自体の持つ語彙的意味を解読する作業を行うだけでなく、話し手が本当に伝えようとする意味を理解するために、全く本質の異なる解釈—文脈情報を駆使した解釈—をも行うわけである。ここで「全く本質の異なる解釈」と言うのは、文脈情報を駆使した解釈は語の持つ意味からではなく、世界についての知識から導き出される情報だからである。ブレイクモア（1994）は「文脈（context）という語が意味するのは、聞き手の知覚能力に基づいたり、記憶に貯えてあった仮定や先行発話の解釈に基づいたりして、聞き手が発話の解釈のために構築する（いくつかの）信念や仮定である」（p.124）と述べている。このように、文脈は世界についての聞き手の信念と仮定の部分集合として心理的観点から定義されているが、ブレイクモア（1994）は更に「これには特定の機会の記憶、特定の個人についての記憶、あるいは一般的文化的仮定、宗教的信念、科学的法則の知識、話し手の精神的状況についての仮定、自分の精神状態を他人がどう見ているかについての仮定などが含まれる」（p.39）と指摘している。発話例（3）に関して言うと、聞き手は確かに“も”の語彙的意味から「先生」の他に「問題に答えられなかった人」の存在を仮定できる。しかし、「他の人」が具体的にどのような人であるかは聞き手が持っている一般社会についての常識などにより推論を行って始めてわかるものである。例えば、聞き手が「生徒が答えられなかった」と判断できるのは、話し手の発した言葉の意味、つまり言内の意味のみから得られる解釈ではない。それは「教育において教える側にいる先生と教わる側にいる生徒を比べた場合、通常先生のほうが生徒より専門分野についての知識をより多く持っていて、その分野において優れているはずだ」といった社会的通念に基づいて推論を行って始めて得られる解釈である。

また、このような表出命題を得るために必要な能力に関して西山（1995）は次のように述べている。

ある発話を耳にした聞き手が表出命題を得るためにおこなっている作業は「言語記号の解読」のごとき機械的なものではけっしてない。そこでは、文の言内の意味のみならず、発話の直前に登場した言語的文脈、聞き手の頭のなかに記憶としてある百科全書的知識、常識、さらには、視覚系、嗅覚系、触覚系とい

った言語知識以外の多様な入力情報が要求され、それらを統合し、推論するきわめて能動的な力が働いているのである。関連性理論では、この能力を「関連性を探し求める認知能力」とみたてる。(西山 1985; p.35)

西山が述べているように、発話の表出命題を特定化するためには、発話がなされたコンテキスト情報が不可欠である。ブラウン&ユール(1983)が指摘しているのだが、一つのフレームにある情報がすべて、特定の発話の解釈に関連があるわけではない。どんな情報が選ばれるかは関連性理論によると、最大の関連性を持つものであるといわれているが、その過程で重要な役割を果たしているのが文脈である。更に言内の意味は同一であるが、それぞれの表出命題が異なる場合もある。つまり、同一の言内の意味でも、コンテキスト次第ではそれぞれ異なる表出命題が導出され、その点で言外の意味が異なる場合もあるわけである。例えば、次に示す中国語発話例(4)「男人伤心也流泪」は二通りの言外の意味に解釈され得るのである。

以上で見てきたように、語の持つ意味と文脈は話し手の伝えようとする命題を復元する過程において両者とも大事な役割を果たしているが、実際聞き手の発話解釈過程においてそれぞれ異なる役割を果たしている。その点で、両者は全く異質なものであるとも言える。例えば、聞き手は文脈の情報を言外の意味を更に「肉付け」し、「拡充」して話し手の伝えようとする意図へ近づけるために使うことができる。そして、聞き手は関連性理論により、処理における最少のコストで適切な文脈効果を得ることができると期待してよい。伊藤(1996)が述べたように、「意味的レベルの延長線上に語用的レベルがある」という観点を支持して言うならば、“也”と“も”の付加された発話を語用的効果とされる“強調”機能を持つと理解できるまで解釈する場合は、意味的レベルの“類似”と理解するに留まる場合にはない処理労力を費やすことになる。つまり、「先生にもこの問題が答えられなかった」の発話で、「この問題に答えられなかった人が他にもいる」と解釈した場合に比べて、“も”の“強調”の機能を理解して意外性を感じ、「先生も答えられなかったのだから、生徒たちには無理だっただろう」と解釈する場合のほうが明らかに処理労力を費やすようになる。一方、関連性理論によれば、発話が関連性を有するのは文脈効果を得る際、聞き手がその発話を解釈するのにかかる労力が無駄ではなく正当な労力であると思う場合のみである。つまり、聞き手が“也”或いは“も”の付加された発話を理解する場合、もし単に“類似”であると理解した段階で推論をストップしないで、“強調”の効果を持つと解釈できるまで推論を続ける場合は、推論を続けることによってそれに見合った文脈効果が得られると信じているからである。

以上の関連性理論に基づき、会話での“也”と“も”を含む発話を分析することによって、それぞれの発話がどのように解釈されていくのか、そのプロセスを考察していく。

#### 4. “也”と「も」が付加された発話に関する考察

以下、中国語の“也”と日本語の“も”の付加された発話例を幾つか挙げる。そして、以上第3節で概観した関連性理論の観点から聞き手がどのようにして“也”或いは“も”が“強調”だと理解し、話し手の言いたい意味を正しく汲み取るのか、普段の会話では気

づかない細かいプロセスを分解することによって、発話解釈過程を詳しく考察する。まず、中国語の“也”に関する発話例を挙げる。

(4) (常に強く振舞っていた男性がお母さんのお葬式で涙を流している映画のワンシーンを見て)

nánrén	shāngxīn	yě	liú	lèi
男人	伤心	也	流	泪。
男	悲しむ	も	流す	涙

- ① 男は悲しい時も涙を流す。
- ② 男も悲しい時は涙を流す。

中川(1982)でも指摘があったように、日本語の“も”の位置はかなり自由なのに対し、中国語の“也”の位置は固定されている。つまり、中国語の“也”が副詞として機能する場合その位置は、常に主語の後ろ、述部の前に位置しなければならない。しかし、発話例(1)からも分かるように、“也”の位置とは関係なく文脈によってはいくつかの意味に解釈される可能性もある。発話例(4)では“也”が「伤心(悲しい)」の後に位置しているが、①のように「伤心(悲しい)」をとりたてる場合と②のように「男人(男)」を取り立てる場合があり、二通りの解釈ができる。“也”が①のように「伤心(悲しい)」を取り立てる場合は「男は悲しい時も涙を流す」意味になる。つまり、例えば「男は感動する時に涙を流すだけではなく、悲しい時も涙を流す」意味になるのである。一方、②のように「男人(男)」をとりたてる場合は「男も悲しい時に涙を流す」と言う意味になる。例えば「女は悲しい時に涙を流すが、男も悲しい時に涙を流す」と解釈することもできるわけである。もちろん取り立てたい成分を音声上の強勢によって表すことも可能だが、すべての会話が語気にたよるわけではない。「男は悲しい時も涙を流す」というのは確かであるが、悲しい時に涙を流すことは人間にとって条件反射とも言うべきもので、これは通常聞き手の注意を引くに値するほどの十分な関連性を有していないだろう。そこで聞き手は話し手が伝えようとすることは他にもあるはずだと仮定し、労力を払って解釈を続けるのである。

中国語には古くから「男儿有泪不轻弹(男は簡単には涙を見せない)」という慣用句があるように、「男は簡単に涙を見せてはいけない」という文化的意識が根強く残っている。つまり、中国人の多くは男は常に気丈に振舞わなければならないという観念を持っている。こういった「男は普段涙を流すような人物ではない」という前提が中国人にあるので、“男人伤心也流泪。”という発話を耳にした時、単純な“類似”と解釈する段階でストップするのではなく、解釈を続け“也”は“強調”の機能を示していると理解する。つまり、このような前提を持つ聞き手はその場の物理的環境(文脈)に照らし合わせ、「めったに涙を見せない男もお母さんをなくした悲しみから涙を流した」という意味での発話であろうという仮定をもつようになる。「涙を流す」ことにおいて一番可能性の低かった「男人(男)」を“也”を用いて“強調”し、際立たせることによって聞き手に意外性を感じさせるのに話し手の目的があっただろうと聞き手は理解するに至る。しかし、人によっては、自分の気持ちに素直になればいいという観念を持っている場合もあり、男も泣くのが当たり前だ

という意識も多くなっているようだ。そのため、「男も悲しいときに涙を流す」のはこのような意識を持つ人にとっては意外に思われまいだろう。このように違う意識や観念を持つ人の間では、当然ながらこの発話を解釈する際、異なる文脈を頼りにして解釈を進めていくので、違う理解が生じるのである。

しかし、聞き手のこのような解釈は延々と続くのではない。第3節で見たように、関連性理論によると、発話が関連性を有するのは、文脈効果を得る際に聞き手がその発話の解釈にかかる労力が正当な労力であると思う場合のみである。つまり、聞き手はある発話を解釈する際、その解釈に費やす労力の結果、それに相応する価値の文脈効果が得られると信じている場合のみ解釈を続け、余分な処理労力を払うことはない。以下発話例(5)も“也”に関する“強調”の発話例である。

- (5) jīnnián tiānqì yìchóng dào le liùyuè yě xià le yí chǎng xuě.  
今年 天気 異常 なる ~た 六月 も 降る ~た 一回 雪  
今年は天気が異常で、六月になっても雪が降った。

五月に雪が降るのも珍しいことだが、六月に雪が降るのは中国ではほとんど有り得ない話である。そして、六月の雪と言えば、中国人は自然と関漢卿の『竇娥冤』という名作を思い出すであろう。冤罪を蒙った竇娥という良家の娘が「もし私が冤罪であることが天に届いたならば、こんな暑い六月にもきっと雪は降るでしょう。」と言い残して処刑されてしまう。そして、奇跡的にも六月に雪が降ったといった有名な話だが、この話を知っている人はもちろんのこと、知らない人でも、気候についての知識を持っていれば、異常に思うに違いない。ここでも“也”は単に「五月に雪が降り、六月にも雪が降った」のように“類似”の機能としてではなく、“強調”の機能としての役割を果たし、聞き手は「こんな暑い六月に（意外にも）雪が降ってきた」と解釈するだろう。似たような中国語の発話例を以下にもう一つ挙げる。

- (6) míngtiān kǎo qīmòkǎoshì xiànzài yímiǎozhōng yě bùnéng làngfèi.  
明日 考 期末試験 今 一秒 也 できない 無駄にする  
明日期末試験だから、今は一秒も無駄にできない。

発話例(6)における“也”も上記の発話例(4)と発話例(5)と同じように、“類似”の機能として使われているのではなく、“強調”の機能を果たしている。発話例(6)においては、長い時間（一時間や一日、一ヶ月或いはもっと長い時間）はともかく、普段の生活で使われる時間の単位として最も短い秒を単位にし、「一秒钟也不能浪费（一秒も無駄にできない）」のように「一秒（一秒）」を“也”を用いて“強調”することによって、「他のもっと長い時間は言うまでもなく、無駄にできない」ことを暗に伝えている。このような推論は日常会話において瞬間的に行われるため、気づかないことが多いが、実際発話例(4)と発話例(5)と同じプロセスを踏んでいる。つまり、文法知識を手がかりに言内の意味を復元するとともに、それぞれの発話でいろいろな文脈を根拠に推論を駆使し、話し手の



本当に言いたい意図を理解していくのである。以上は中国語の“也”の付加された発話例であるが、以下、日本語の“も”を用いた発話例で、“強調”の機能を果たしているものを見てみる。

(7) あの子は親の言うことも聞かない。

発話例(7)を聞いた瞬間に「この子は他の人の言うことを聞かないだけではなく、親の言うことも聞かない。(本当にひどい)」と誰もが思うだろう。「親」以外の存在を感じさせるのは、“も”の“類似”の文法的機能からくるものである。また、聞き手はたぶん「他の人」の存在を感じるだけに留まらないであろう。普通「子供は親のいうことを聞くものだ」という一般的な世間倫理から、「何で親の言うことも聞かないのだろう」と意外に思うようになるだろう。このステップは“も”の“類似”機能によるものではなく、社会通念つまり「子供は親の言うことを聞くべきものだ」といった文脈情報を手がかりに推論して得た解釈である。つまり、この解釈は発せられた語の言語的意味がわかるだけでは得られず、文脈情報を動員してはじめて得られるものである。この発話でも、聞き手は“も”の持つ文法的機能を“類似”であると解釈するところで止まるのではなく、“強調”機能としての役割を果たしていると理解するまで解釈を続けるのである。それは聞き手が常に最善の関連性を求め、“強調”であると解釈するまで労力を払って処理を行うことはその労力に相応する価値のある解釈を得ることができると信じているからである。似たような日本語の発話例を以下にもう一つ挙げる。

(8) 彼女はノックもしないで、突然入ってきた。

発話例(8)も“強調”の例である。最低限のマナーとして、部屋に入る前にはノックをし、「はい、どうぞ」と言われたら挨拶をして入るのが普通である。しかし、挨拶どころか、ノックもせずいきなり入るのはとても非常識な行動であると誰もが思うだろう。ここで「非常識だ」と解釈できるのは、発話例(8)で用いられた言語そのものによって推論して得られるのではなく、部屋に入る前のマナーという文脈情報から推論して得られるのである。このように、この発話例での“も”も単純に“類似”ではなく、聞き手に意外性を感じさせ、“強調”の機能を果たしているのである。

以上で見てきたように、中国語の“也”と日本語の“も”は統語論上違いがあるものの、“強調”機能を持つ発話を解釈する過程において同じ原理が働いている。もちろん、違う文化、或いは違う経験、知識、常識を基に人によっては異なる解釈を得ることもあるが、巨視的な視点で見た場合、聞き手は以上の発話例の解釈過程で、“類似”と理解した段階で推論をストップするのではなく、より多くの労力を払うとしても常に最善の関連性を求め、最終的には“強調”だと理解するまで解釈を続けるのである。

## 5. 終わりに

中国語の“也”の用法が日本語の“も”の使い方と一対一で対応していないことは明ら

かであるが、例えば、統語論的な違いから日本人母語話者が中国語を学習する時、“也”の位置を間違えたり、違う意味に受け止めてしまったりすることがある。一方、中国人母語話者にとって“も”の統語論的位置は中国語と違うものの、さほど難しくはない。しかし、“も”が“類似”ではなく“強調”の意味として使うとなると多少混乱が生じやすい。以上で述べてきたように、それは単純に文法だけで解決できる問題ではない。時には、日本独自の文化が根底にあり、それを理解できないかぎり、日本人話者が本当に言おうとする意図を正確に理解することは困難である。これは、“也”や“も”に限ったことではないが、ある言葉を教える際、勿論その語の持つコアの意味を教えること、そして統語論的位置などを教えることはとても重要である。と同時に、上級レベルになると文脈によっていろいろな解釈ができることにも注意を払う必要があると念を押さなければならない。このような教育現場で実際に起こっている問題を解決するためには、具体的にどのような教え方が一番理想的であるかを考案する必要があると考える。以上のような様々な問題点を踏まえながら、適切な教え方を考え、実践することでどのような効果が得られるかを考察し、研究を重ねていきたいところである。

## 注

- 1) 伊藤(1996)では“同類／累加”とし、中川(1982)は「並列添加」とし、楊(2002)では「類似事態の追加」としているが、本稿では一概に“類似”とする。
- 2) 伊藤(1996)では“意外／強調”、中川(1982)では「強調」、楊(2002)では「強調」と「意外性」などと称されているが、本稿では一概に“強調”とする。
- 3) 詳しくは崔(2006)「中国語の『も』について－関連性理論の観点から－」を参照。
- 4) 沼田(1995)によると、「とりたてのフォーカスとは、とりたてのスコープ内にある要素で、文脈等の語用論的情報から、他との範列的な対立関係を集約的に表す要素(つまり自者)、と捉えられる構成素の範囲である。最大のフォーカスはスコープと一致する。」(p.177)と定義している。
- 5) 伊藤(1996)は「意味的レベルとは、一単語(或いは一文)が、文脈などからの情報や、音声的卓立、モダリティ要素の付加などに関わらず、常に担っている意味素性(或いは伝達内容)を問題とするもので、聞き手に対する話し手の心理態度などは問題としないものである」(p.1)と定義している。
- 6) 伊藤(1996)は「語用的レベルとは、意味的レベルでのいわゆる“意味”を踏まえ、文脈などからの情報や、音声的卓立、モダリティ要素の付加などを考慮し、主に、聞き手に対する話し手の心理的態度を問題とするものである」(p.1)と定義している。
- 7) 本稿では一概に“強調”とする。
- 8) 中国語の肯定を表すコピュラ。「～だ」、「～である」という意味を表す。
- 9) 本稿では“類似”としている。
- 10) 本稿では一概に“強調”とする。

## 参考文献

- 伊藤健人 (1996) 『「も」の取り立て機能—意味的レベルと語用的レベルの考察—』  
神田外語大学大学院言語科学研究科提出修士論文
- 崔 (2006) 「中国語における“也”について—関連性理論の観点から—」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』第一集 昭和女子大学
- つくば言語文化フォーラム (1995) 『「も」の言語学』ひつじ書房
- 中川正之 (1982) 「中国語—とくに助詞『も』に対応する一音節副詞をめぐって—」  
『講座日本語学 11 外国語との対照Ⅲ』森岡健二・寺村秀夫 (他) 編 明治書院
- 西山佑司 (1995) 「言外の意味を捉える」『月刊言語』Vol.24. no.4. 大修館書店
- 沼田善子・徐建敏 (1995) 「とりたて詞『も』のフォーカスとスコープ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 楊凱榮 (2002) 『「も」と“也”—数量強調における相異を中心に—』『対照言語学』  
東京大学出版会
- Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances : An Introduction to Pragmatics*. Oxford, Blackwell. (日本語訳: 武内道子・山崎栄一 (訳) (1994) 『人は発話をどう理解するか—関連性理論入門—』ひつじ書房)
- D. スペルベル, D. ウイルソン著; 内田聖二 [ほか] 訳 (1993) 『関連性理論: 伝達と認知』研究社出版